

## リカードゥ価値尺度論の一考察：マルサスとの関連 において

吹春，寛一

<https://doi.org/10.15017/2920503>

---

出版情報：経済論究. 6, pp.1-19, 1959-10-20. 九州大学大学院経済学会  
バージョン：  
権利関係：

## リカードウ価値尺度論の一考察

——マルサスとの関連において——

吹 春 寛 一

は し が き

一般にリカードウは古典学派における完成者といわれ、マルサスは俗流的という言葉で呼ばれている。いまここにおいてリカードウが自らの理論を、スミス、マルサスの理論に如何に対峙させ、完成に努力していつたかを価値尺度論を通して考察せんとするものである。

彼は『原理』第一章第六節において次の如くいつている。「賃銀の騰貴した場合には、価格測定の媒介物よりも固定資本の使用せらるること少なき貨物のみが騰貴し、これより多くの固定資本が用いられたものの価格はみな積極的に下落すべき理云々<sup>(1)</sup>」と。これは彼の貨幣理論において労働価値説の側面と数量説的側面が存するといわれることに全く関連なきものとは解されないのであるが、あわせてこの引用文の意義、さらに彼の交換媒介物選定の理を求めてみたいと思うものである。

以下、まずマルサスの価値尺度論を述べ、ついでこれに対するリカードウの反論及び彼の尺度論について述べることにする。

- (1) D. Ricardo ; On the Principles of Political Economy and Taxation ; The Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. I, p. 46. 小泉信三訳「経済学及び課税の原理」(岩波文庫版)上巻 50頁

マルサスのいう価値、自然価値はスミスのいうそれであり、その内容は労働、利潤及び地代によつて構成されるものであつた。いま価値尺度論を展開す

るにあたり、マルサス自身が行なっているように、一応地代を捨象すれば、価値実体は労働及び利潤となるが、そのうち価値の主要なる要素は労働であるという。未だ資本の存せざる未開社会にあつては、すべての貨物は労働のみよりなり、その価値は投下労働量によつて決定され、すべての交換はこれによつて規定されるゆえ、価値の尺度もまた投下労働量によつて行なわれ、それが同時にその貨物の支配する労働量とも一致することとなるのである。しかるにより發展せる、資本の存する社会にあつては、交換が投下された労働量に比例して行なわれるのを妨げる諸原因が存することとし、投下労働説にもとづく尺度論を否定することとなるのである。その諸原因<sup>(1)</sup>のうち最大の効力を有するものが利潤である。

(1) この諸原因として『原理』第一版では六項目が論述されているが、第二版においては、これらの諸点は削減されてしまつている。しかしながらこれらがマルサスの脳裏から完全に消し去られていると解することはできない。第二版の次の引用はこの点の消息を物語るものと解される。「貨物の交換価値がそれに使用せられた労働量に比例することを妨げる他の諸原因が実際にはたらいしている。しかしすでにより立入つて論じたもの〔労働及び利潤の問題——引用者〕は極めて有用であり、かつこの問題にとり全く決定的であるから、特別に他のものにふれる必要はない。<sup>(3)</sup>」

(2) T. R. Malthus ; Principles of Political Economy, Works, Vol. II, p. 55 et seq. 吉田秀夫訳「マルサス経済学原理」(岩波文庫版)上巻 147頁以降。

(3) T. R. Malthus ; Principles ; N. Y., 1951. p. 91. 邦訳(上) 162頁

さて、価値の尺度——A商品の価値をB商品の価値ではかるということであるが、価値が労働及び利潤によつて形成される以上、A商品の価値は労働及び利潤を含む。他方B商品の価値は……ここでマルサスは停る。そして等価形態におかれる商品の価値が労働のみよりなるべきことをはつきりと述べる。「価値の標準尺度に選ばれる一物は、その要素の一つとして利潤から成つていてはならないことは全く確実である。」(Ibid., p. 124. 邦訳(上) 235頁) 等価形態にある商品は何故利潤を含んではならないのかという問題は、後にリカードウの見解を吟味する際の一つのキーポイントになるのでここで少し立入つて考察しよう。

マルサスをしてかかる主張をなさしめた理由は次の二点に要約することがで

きよう。

(一) 彼は価値尺度を問題とするに当り、その二大目的について次の如くのべている。「第一に、容易にかつ、相互に比較しての総ての貨物の相対価値を測定し、かつ総ての販売者をして、その販売によつて得る利潤を評量し得せしめること。」(Ibid., p. 84. 邦訳(上) 144頁)しかるに彼の利潤概念は極めて曖昧であり、一般には、前払に対する「附加物」乃至「超過分」として把握されている。そしてこの超過分が流通過程における商品に対する需要供給関係の変化から生ずるものとして理解しているため、かかる利潤は、利潤を含める等価物を提供することによつては発生し得ないという想定がある。従つて、等価物は利潤を含んではならないと主張せしめるに至つたものと解されるが、かかる不等価交換はマルサスにとつても忘れ去られることがあつてはならない。(後註(8)参照)

(二) その二は、利潤率の変化によつて価値変化が起るものと想定しているために、かかる利潤部分を含める可変的なものによつては価値の尺度を行なうことはできないという考えである。<sup>(4)</sup>この点は古典学派に共通するところであり、この危惧はリカードウにおいて、不変の価値尺度の否定という形で実現する(後述)。

(4) Ibid., p. 89, p. 91, p. 123 passim. 邦訳(上) 158頁, 161頁, 234~5頁。Malthus to Ricardo, ca. 21 July 1823. 等。

斯様に価値による価値の尺度という問題は労働と利潤との対立に解消されてしまつてゐるが、それではどうして労働は質的に異なる利潤部分をも測定することができるのかという問題が自ら生じてくる。この点に関する彼の解答は次の如くである。「労働で利潤をはかることは〔利潤部分が労働からなるものではないということとは——引用者〕全然別なはなしである。……わけても諸商品が利潤からうる価値の増加分を労働ではかるといふことほど自然にして明白なことはありえない。なぜなら利潤は前払に対する百分率であり、そして大多数の商品の主要な本来の前払は必要な労働量だからである。<sup>(5)</sup>」

(5) T. R. Malthus ; Definitions in Political Economy, 1827. 玉野井芳郎訳「経済学における諸定義」(岩波文庫版) 85~86頁

上に述べたように交換を不等価交換として展開しているが、これを等価交換なるが如く、逆の関連において説いたものがいわゆる支配労働尺度説である。彼はいう。「総ての場合において、かつ総ての事情のもとにおいて、それが支配すべき労働量、または同じことになるが、人々がそれを獲得せんがために与えるであろう労働の値の量 the quantity of labour's worth は、その交換上の相対価値の極めて正確な尺度であろう。」(Principles, p. 94. 邦訳(上) 196頁) すなわち等価物を与えることによつて、等価物が含む以上の価値をその交換者にもたらすならば、換言すれば利潤を伴なつて交換がおこなわれるならば、その等価物は利潤部分まで含んだ価値量を支配 command し、あわせて利潤部分をも測定したことになるのである。そして「一商品が通常支配する労働を価値の尺度と考へて正しいのは、まさにその労働が現実にそれに投ぜられた労働に利潤を加えたものを測定するからである。」(「諸定義」邦訳 158頁) かくて<sup>(6)</sup>不等価交換による利潤の問題は解決されたことになるのである。

(6) 一見マルサスの利潤論は譲渡利潤と解される。彼によれば、商品の価値は生産費に基礎をおき、需要供給関係——交換によつて決定された諸貨物に対する評価 estimation (Principles, p. 60) であつた。そして労働以外に商品の内在価値を決定する他の諸原因を認めているために、かかる疑問に対しては交換者双方に利潤を生じうると答へるであろう。(この「評価」の内容については、彼のいう需要——購買する能力と意思、及び後者の重視——の面から吟味すべきであるが、ここでは割愛する) しかし労働価値説の立場からすれば譲渡利潤に終つているのであり、この点より立入つて考察すれば、製造業部門商業部門では譲渡利潤、農業部門では控除説の見解という方がより正確であろう。(『原理』第二篇第一章就中第八節参照)

更に注意しなければならないことは、彼が支配労働という場合、この労働なる語が死んだ労働のみならず、生きた労働をも意味しているということである。従つて支配労働の例証としてあげているところは農業労働における賃銀の問題である。彼が「一定数の使用人の賃銀を生産するに必要とされる労働量に、これらの前払に対する労働で見積つた利潤を加えたものは常に賃銀が支配する労働量に正確に等しくなければならぬ<sup>(7)</sup>」といつて、支配労働説による賃銀の価値を説明するとき、最後の「支配する労働量」という言葉が、利潤部分をも含めて労働者が創出した全価値量を意味していることは充分理解し得るとこ

ろである。従つて先の引用にあつた「人々がそれを獲得せんがために与えるであろう労働の値の量」なる言葉は生きた労働をも意味しているものと解される。この点を軸として支配労働説を更に一步進んで規定したものが後述する「労働の価値不変」概念であり、「標準労働」の概念である。

(7) T. R. Malthus ; The measure of value stated and illustrated. 1823, 玉野井芳郎訳「価値尺度論」(岩波文庫版) 42頁

上の引用に続けてこう述べている。「一商品の自然価値がそれを構成する労働と利潤ではかられうるならば、一定数の使用人がうけとる穀物賃銀の自然価値は常に同一でなければならないこととなる。しかるにこのような賃銀は、…それと交換される労働量と必然的に等しくなければならない。したがつて一定量の労働の価値は、土地の肥沃度及び労働の穀物賃銀の上に生じうる種々雑多な事情のもとで、常に不変でなければならない。……賃銀の生産に要する労働量に変化するにも拘わらず、依然としてひき続き同一の自然価値をもちうるものは文字通りに労働と不変の関係にたつ一定数の使用人の変化する賃銀だけである。そして一商品が支配する労働を、その自然価値及び交換価値双方の標準的尺度たらしめるものは、まさしく労働の種々な穀物賃銀の自然価値におけるこの必然的不変性である。」(邦訳 42~43頁)『原理』において「一日の労働を支配する能力」(Principles, p. 98, p. 99. 邦訳(上) 201頁, 202頁)といつていのは明らかにこのことである。この引用において「一定量の労働の価値は……常に不変でなければならない」といつているが、この「一定量の労働の価値」なる言葉の意味するところは、労賃部分と利潤部分の和は一定でありうるということであり(「価値尺度論」邦訳書 pp. 38~42.)、同じく「労働の価値不変」の説明として『原理』に展開せるところを別言すれば「一労働者が一労働日に附加し得る労働量は一定である」ということ以外の何ものでもない(Principles, pp. 98~99, 邦訳(上) 201~202頁)。これがすなわち彼のいう「労働の価値不変」なる概念である。つまり彼のいわんとするところは次の如くなる。賃銀は労働及び利潤を支配し、かつ一労働者が一日に投下し得る労働量は常に一定と想定しうるために、賃銀の価値(労働の価値)は一定不変である。もしも労働の価格が変化した場合には、それは貨幣価値の変化(穀

物質銀であれば穀物価値の変化)と看做すことによつて、労働の価値不変は貫徹される。<sup>(8)</sup>

(8) 支配労働はあくまでも尺度の問題であり、価値実体は労働及び利潤(または地代)によつて形成されるものであつたが、ここで彼は、賃金が支配しうる量(労働プラス利潤)イコール賃金の価値となしている。すなわち彼のこの等置法によれば、商品の支配労働量イコール商品の価値となる。この気づかざる論理の転換は単にここに限つたことではなく、しばしばリカードを手こずらせたところである。労働の価値不変を主張せんが為、すべての変化を商品の側に転嫁せしめているのもその例外ではない。

なお、先に吾々はマルサスが利潤を不等価交換に求めたために、等価形態にある商品は利潤を含んではならないことをみた。彼によれば「基本的生産費」は「供給の諸条件」に等しく、これは労働プラス利潤よりなるものである(「諸定義」邦訳159頁, 180~181頁, 定義 37~39)。他方支配労働は労働プラス利潤である。したがつて「通常 ordinarily」(Principles, p. 60.)は基本的生産費=労働+利潤=支配労働量である。この「通常」なる語の意味するところは明確でないが、かくて不等価交換は完全に消し去られてしまつている。

またマルサスが支配労働説証明原理として使つている「労働の価値不変」という言葉の内容は、古典学派で使用されている所謂「労働の価値」なる概念と少し趣きを異にするのであるが、その責はマルサスにあらう(彼にとつて、労働者が附加しうる価値量は労賃の価値量だけという想定が根底にあるのだが)。リカードは労働の価格と投下労働量が必ずしも一致するものではないと主張したところに大なる功績があつたのであるが、他方マルサスはこの点を、農業生産物が有する特殊性という形で解決した。すなわち賃銀←生活必需品=穀物=農業生産物というこの同一視によつて、農業生産物だけが労働(力)を維持する特殊の使用価値を有するものとして理解しているのである。そしてこのことが彼の重農主義の見解にも通じ、生きた労働を含めて支配労働説が展開されていること、また次にのべる標準労働が農業労働において想定されていることに注意しなければならない。

ふり返つてみるに、価値尺度論は商品(対象化された労働)をその出発点としたのであるが、不変の価値尺度を求めたマルサスは、価値形成者としての労働と結果としての労働を混同することによつて、等価形態に生きた労働を想定し、前述の如き意味の「労働の価値不変」を提唱した。従つて彼が「労働のみが価値の尺度である」という場合、死んだ労働を生きた労働に対する支配力によつてはかるということを意味していたことになるのである。

更にその標準概念として「標準労働 standard labour」なるものを展開する。これは彼自身明確に定義づけをなしているものではないが、「通常の熟練度と強度を伴なつて、普通農業労働者が創出しうる一日分の労働量<sup>(9)</sup>」と言い換えることができよう。かかる意味の、単位としての標準労働を何日分支配するという形で、一国における価値尺度を考えるのであるが、同時に彼が求めたものは異時異国にも妥当するような不変の尺度であつた。そしてこの標準労働をもつて異時異国にも直ちに適用できるものとして実際に援用したのである。<sup>(10)</sup>いま異時異国にも通用するような尺度を求めることの意義については一応措くとして、リカードウは異国の労働を直ちに同一平面上に並べることに反対するのであるが (Notes on Malthus : Works, Vol. II, p. 87. 吉田訳「マルサス経済学原理」はこの「マルサスへのノート」を含む。該訳書(上)188頁, R註), リカードウにおける標準労働概念の不妊(後述)と考えあわせるとき、この点はマルサスの一メリットとして認めることができるであろう。

- (9) 標準労働概念はもつぱら『原理』第二版において展開されているものであり(第一版では a day's labour なる用語が散見できる。『価値尺度論』では標準労働なる語は発見できなくとも、かかる概念は芽ばえているものと解される。「普通労働」「日傭労働」なる語がこれに照応しよう)、上述のパラフレイズの根拠となるものを二三あげれば次の如きものがある。「あらゆる国において、この種の労働〔普通農業労働——引用者〕は、上述せる如くに、あらゆる他の種類の労働がそれに解消せられ得る標準と考えられ得」(Principles, p. 116, 邦訳(上)225頁)「標準とせられるべき各時期の普通農業労働は、正確に同一程度の力をもち、そして同一時間数だけ使用されるのであり、」(Ibid., p. 96, 邦訳(上)199頁)「農業労働をもつてくるのは、それが最も普通の種類の労働であつて、労働者の食糧を直接に生産し、また土地の差等及び利潤の必然的な変化ともつとも直接的に関係があるという明白な諸理由からである。」(『価値尺度論』邦訳27頁註)等。

- (10) Principles, p. 96 et seq., p. 108 et seq., 邦訳(上)198頁以降, 213頁以降

以上吾々はマルサスにおける支配労働説の出発点から標準労働概念に至るまでの彼の尺度論をたどつてきたものであるが、ここで再び彼の尺度論の意義をふり返つてみなければならぬ。彼の云う尺度商品は利潤を含まず、ために彼は「資本なしに均一分量の労働のみによつて獲得せられた金」(Principles, p. 125, 邦訳(上)236頁)をもつて、その理想にかなつたものとしたのであるが、



かかる想定は許されるであろうか。彼自身認めるようにその答は否定的である。何故なれば彼の云う自然価値は労働、利潤及び地代によつて構成されるものであつたからである。彼はいう。「もし例解の目的で貴金属は特定の国においてはその価値において不変であると推定することが好都合に思われるならば、貴金属は資本なしに労働のみによつて獲得せられ、したがつて常に労働に対して同一の不変的比例をとるものと考えなければならない。しかしながら労働の貨幣価格のこの一定性は例解のために採用せられた仮定にすぎないことを述べるのは正当であろう。」(Ibid., p. 125, 邦訳(上) 237頁)と。続けて彼が述べていることは貨幣の価値についてであつて、何らこの「仮定」の問題ではない。しかし他の箇所述べている次の言葉はこの点に対する彼の解答と看做すことができよう。「かくの如き事情にある〔使用せられた労働量の正確な尺度たらしめ得ない——引用者〕貴金属が、どれだけ貨物の交換価値の——それに使用せられた労働の、でないにしても——良い尺度であろうかは全く別の問題である。」<sup>(11)</sup>と。すなわち理論的に尺度たり得ないということと、実際に尺度機能を営むということとは関連なきものであるというのである。つまり彼の尺度論は彼の価値論貨幣論にとつて充分内在的なものとしては把握されておらず、両者の間に一つの断層が考えられる。ここでいう内在的でない(リカードウのそれに比しても)というのは、彼が貨幣の本質を価値の代表物 **representative**、一般的交換手段及び価値の尺度という点において強調するにも拘わらず、この尺度なる性格が、尺度機能を有するが故に貨幣たりうるという意味においてではなく、むしろ貨幣の存在するがゆえにこれが尺度機能を行なうという形で把握されている、という意味においてである。従つて、彼が価値尺度は労働によつてなされるべきであるが、実際には貨幣がこれを行なうと強調するとき、これは貨幣の既存を予定しており、この貨幣によつて尺度が可能であるといつていることを看過してはならない。<sup>(13)</sup>

(11) Principles (1. ed.), Works, Vol. II, p. 88. 邦訳(上) 191頁

(12) Principles (II. ed.), p. 52, 邦訳(上) 86頁, 「諸定義」邦訳 164頁註

(13) Principles, p. 95. 邦訳(上) p. 197. その他特に第二章第五節参照。

なお、この点に関連して、マルサスが貨幣の発生を使用価値観点から、すな

わち使用価値としての使用価値の転態の困難を打解するものとして、交換媒介物の登場を展開している (Ibid., p. 52 et seq. 邦訳 (上) 85頁以降) ことも考えあわせるべきであろう。

## 2

古典学派はそれぞれ不変の価値尺度を求めたのであるが、いまここで、彼等の理論の外延を知るためにも、彼等の求めた尺度が如何なる条件にたつものであつたかを簡単にみておきたい。

第一に、彼等は資本構成を全く異にする全ての商品に妥当するような尺度を求めた。全ての商品が生産条件を異にする以上当然のことといわねばならぬ。商品の価値は労働のみによつて形成されると説きうる人々にとつては何ら問題となり得ないところであるが、彼等にとつて、労働と利潤とは全く異なるものであり、資本の構成の相違は価値 (労働と利潤) 構成の異なる商品をもたらし、これは彼等の尺度論にとつて重大なる問題であつた。これはリカードウにおいてよりはつきりしている。

第二点。マルサスが異時異国にも直接適用できるような尺度を求めたことは明白であり、彼の支配労働はかかる条件をもみたすものとして展開されている。他方リカードウもこの問題について次の如く述べている。「諸商品が隔たれる時期にどのような関連をもつかを確かめんがために、絶対価値の完全なる尺度をもつことは政治経済学における大なる必要事である。価値を有する如何なるものも、同じ時同じ場所において全ての他の諸商品の相対価値のよき尺度であるが、隔たれる時及び隔たれる場所での絶対価値の諸変化を指示するのには役立たないであろう。」 (Absolute Value and Exchangeable Value ; Works, Vol. IV, p. 396.) かかるものを望んだとしても、彼にとつて不変の価値尺度は一国同時点においても存在し得なかつたし、彼の理論展開は一時期一国内に限られているとみる方が妥当であろう。

第三点は、一般に内在的尺度と外在的尺度といわれるものに関してであるが、彼等は共に内在的価値、絶対的価値の尺度を研究の主題とすることを宣言

する。いま絶対価値概念如何の問題は措くとして、彼等が求めたものは不変の価値をもつた一貨物であつたことは注意しなければならない。しかるに商品はあくまでも外在的尺度たるにすぎなく、ここに彼等の一つの混乱が始まる。リカードウはマルサスへ次の如き手紙を書いている。「私こそ或種の外部の external 商品にして、その生産に当つて労働への前払の貨幣価値が増加するときに、蓄財の利潤の方が減少してゆくところのものの一箇または数箇をもつて確実なる尺度であると解しようとしているものです。」(Ricardo to Malthus, 18 Sep. 1821. 以下書翰は日付のみ記すが、訳文は殆んど中野正訳(岩波文庫版)による。) また他日次のようにも書いている。「それ自身価値をもつていないものは価値の尺度たり得ないとする点で我々は意見の一致をみていると信じます。またある価値の尺度が適切なる尺度であるためには、それ自身は不変たるを要するとする点でも、さらに一箇の物を他のものから排して価値の尺度として選定する際には、我々はかかる選択について何らかの適切なる理由を明示しなければならぬ、けだし適切なる理由が与えられないとその選択は全く恣意的のものとなるから、とする点でも我々は一一致をみていると思います。」(Ricardo to Malthus, 3 Aug. 1823.)

しかしながらリカードウはマルサスの支配労働尺度説には満足することができなかつた。彼が該説を否定する重要な論拠は次の諸点に要約することができよう。

a) 第一に、労働の価値は可変であり、不変と想定することは許されないということである。彼によれば労働の自然価格は労働者及びその家族を養うために要せらるる食物、必需品及び便宜品の価格によつて定まるものであり、かつそれは労働の価値を正当に表現するものであり、またそのように正しく支払われるものと前提している。従つて労働の価格は食物及び必需品の価格の変化によつても変化し得るし、「吾が国の民衆の半数を死滅させる疫病」(Ricardo to Malthus, 29 April 1823.) を想定するだけでも充分であると主張するのである。またマルサスは全ての変化を商品側に転嫁して「労働の価値不変」に固執したのであるが、この点に就いて手紙においていう。「私はこの転換の中に何らの

利益を認めることができません。」(Ricardo to Malthus, 29 April 1823.)

b) マルサスは価値尺度をむしろ労働と利潤との軌轢として展開したのであるが、この点に関するリカードウの次の言葉は全く正しい事項を含んでいる。「貴下が、海浜で労働のみによつて拾いあげられるところの小エビや銀の価値に対して、羅紗は正確なる尺度となるものではない、と云われるのは正当ですが、海浜で労働のみによつて拾い上げられる小エビや銀は羅紗の価値の正確なる尺度になると考えていらつしやるのは、私は奇妙な不調和だと考えざるを得ません。かりに貴下が正しいとすれば、羅紗もまた正確なる価値の尺度であるはずで、けだし測定される物は、貴下がつて測定なきところのものと同じように、適切なる尺度たるに相違ないからであります。」(Ricardo to Malthus, 28 May 1823.) 価値の尺度はあくまでも価値による価値の尺度であり、価値が労働及び利潤より形成される以上、労働及び利潤をもつて価値の尺度となすべきことは当然であり、リカードウの尺度論がかかる視点から展開されていることは後にみるところである。

c) リカードウのマルサスへの手紙の中に次の一文がある。「一反の羅紗の製造に従前よりも多量の労働を支出し、しかも羅紗をより少量の労働と交換するということはまつたくありうることでしょう。これが私の頭の中にあつて、貴下の尺度を援用することが得策であるとすることに断乎として反対しているいま一つの議論であります。」(Ricardo to Malthus, 15 Aug. 1823.) これは次の如く解されよう。マルサスにとつても不変の価値尺度は絶対価値乃至自然価値に関してのものであつた(「価値尺度論」邦訳 p. 14, 絶対価値概念はリカードウのそれほど明確ではないが)。しかるに絶対価値が増大しても、利潤の減少は支配労働の増大を結果し得ぬゆえ、支配労働は絶対価値の正確なる尺度とは認め難い。つまり不変の価値尺度とはなり得ないということになるのである。

簡単ながら箇条書的にみたりカードウの反論は同時に彼の価値尺度論の性格を示すものであるが、次に彼の尺度論を検討する。

## 3

まずわれわれはリカードウが何故「不変の」価値尺度を求めたかを尋ねてみたい、それは同時に「不変」なる語の意味するところを知ることにもなるからである。

彼は『原理』第一章第六節の冒頭において次の如く述べている。「諸貨物の相対価値が変動した場合、その何れの真実価値が下落し、何れの真実価値が騰貴したかを確かめる手段を有することが望ましいであろう。而してこのことは、諸貨物をば、交々それ自身他の諸貨物の蒙る変動を全く免るる、或る不変の標準尺度と比較することによつてはじめてこれを行なうことができる。」(Works, Vol. I, p. 43, 邦訳(上) 47頁, 附点引用者) また次のようにもいう。「〔正しい価値の尺度は——引用者〕、提供された諸商品の価値において生じたすべての諸変化を、すなわちそれらを生産する困難の増大または減少以外の商品変化の他の原因にあらざる諸変化を正確に示すであろう。」(Works, Vol. IV, p. 367.) 「諸商品が交換価値において変化したとき、その商品において価値上の変化が生じたものであることをわれわれに知らしめんがために、斯様な絶対価値の尺度をもつことは、政治経済学における切実なる要求である、ということは何人も疑うことはできない。」(Works, Vol. IV, p. 399.)

これらの引用において、「真実価値」「生産の困難」または「価値」という言葉が絶対価値を意味していることは充分知りうるところである。すなわち彼にとつては絶対価値の尺度が完全なる尺度であり、不変の価値尺度である。しからば用語矛盾とも思われるこの絶対価値の尺度という言葉は何を意味しているのであろうか。

われわれが「A商品はB商品に値する」という場合、ここに表現されているものはA商品の価値であり、A商品のB商品価格ともいうことができる。これは、A商品自体の価値変化によつても、またB商品の価値変化によつても変化を蒙るものである(リカードウはつとめて相対価値論者である)。もしもA商品の価格変化がA商品自体における絶対価値の変化の結果として表現されて

くるものであれば何ら問題となり得ないのであるが、B商品における価値変化の結果として表現されてくる場合、その価値価格は正確なる価値表現としての仕事を放棄していることになる。従つてその為にリカードウは尺度商品の価値不変を主張するのであり、彼のいう「不変」は被尺度商品にとつての不変を意味する。彼が最後の数年さかんに使つている「絶対価値の尺度」「真実価値をはかる」という言葉は、一商品の絶対価値における変化が、正確にその商品の相対価値乃至交換価値として表現されてくることを問題にしているものと解されよう。<sup>(1)</sup>

(1) 彼は「不変の価値尺度」なる語を「それを生産するに常に等しい労働量を必要とするような一貨物」といい換えているところがある。しかし同時に、かかる貨物が絶対に存在し得ないことをもはつきりと述べている。これは『地金高価論』より『遺稿』に至るまで随所にみられるところであるが(Works, Vol. I, p. 17. footnote 3, p. 63, p. 275, Vol. II, pp. 29~30. Vol. III, p. 65. footnote. Vol. IV, p. 4(2.)), 労働価値説の一応の貫徹を考へておつたりカードウにとつては当然の言葉である。しかし彼の「不変」の義を「常に等労働量を要する」という意味にのみとすることは、少し狹隘に解することになりはしないであろうか。彼は『原理』第三版にはじめて附加した「不変の価値尺度論」において、「かりに我が貨幣の生産上に要せられる労働量が常に同一なることがあり得たとしても、而かもなおそれは、価値の完全なる標準、または不変の尺度とはならぬであろう云々」とのべている(Works, Vol. I, p. 44, 邦訳(上)47頁)。續けて簡単にのべているリカードウの言葉は以下ここに検討するところである。

ここでわれわれはリカードウの絶対価値及び相対価値を問題としなければならぬのであるが、彼のいう絶対価値・真実価値は投下労働量によつて決定され、これは同時に生産費でもある。またこの生産費は労働と共に利潤もあわせ含むものであり、利潤は労働生産物からの控除部分として展開された。他方交換価値・相対価値を「一商品がその絶対価値とは何らの関連もなく、他商品の一定量を支配する力である」(Works, Vol. IV, p. 398.)と定義づけている。交換価値が絶対価値によつて規制され、従つて支出された労働量によつて規制されると説く以上、「絶対価値と何等の関連もなく」というのは少し度を越した表現であろうが、商品が市場に現われたときには、その商品に投下された労働量とは異なる価値を受取るということを意味するものである。彼はいう。

「つまり一箇の価値をもつている労働が商品に対して支出されたが、それが市場に現われるとき、それは別箇の価値をもつ労働と交換される。」(Ricardo to Malthus, 3 Aug. 1823.) 従つてここでこの間の事情をよりよく知るために、彼の相対価値の内容について考察しよう。

リカードウによれば、商品の相対価値は二つの原因によつて決定される。第一の原因はその商品を生産するために必要とする相対的労働量であり、第二の原因は賃銀の騰落、あるいは彼にとつては同じことであるが、利潤の騰落である。この二つの原因の内、前者即ち投下された労働量は商品の相対価値にとつて決定的なものであるが、後者即ち利潤(率)は軽微なる効果を有するにすぎないものである、しかし決して無視し得ないものである。彼が相対価値は投下労働に「比例する」とか「依存する」といつているのはこの点の消息を物語るものである。従つて個々の商品にとつて、絶対価値と相対価値との間には一つの偏差が生ずることとなるのである。そしてこの偏差が彼の尺度論において決定的な意義を有する以上、かつ利潤率の変化による相対価値の変化を説く以上、彼の資本＝利潤規定を吟味する必要がある。

彼はこの第二の原因としての利潤に関してマカロツクに次のようにいつている。「第二は、かかる労働の結果が市場にもたらされるまでに経過しなければならない相対的時間がこれです。固定資本の問題のすべては第二の原則に帰します。」(Ricardo to McCulloch, 2 May 1820.) 『原理』の利潤論においては、貨物の価値が賃銀と利潤に分割されると説きながらも、他方『遺稿』においては利潤を、「それは、商品が生産されんがために彼をして前払を必要ならしめる蓄積された労働に対する報酬である。」と規定している(Works, Vol. IV, p. 380.)。この如何にもマルサスの概念規定は「商品を市場にもたらすまでの時間」乃至「資本の回転時間」が利潤を生ぜしめるが如く解せしめるに至らしめたものである。すなわち利潤獲得をむしろ当然のこととして理論を展開したことは、彼が一方では投下労働による利潤を説きながらも、他方ではなおマルサス＝マカロツク理論を完全に克服するに至つていなかつたことを意味するものと解される。

彼の設例を一つとる。いま小エビ取りの業種において、一定量の小エビを獲

得するのに十人の労働者が一日かかつたとする。織物業種において、一定量の織物を生産するのに同じく十人の労働者で一年間を要したとする。またブドウ酒作りにおいては、その一定量をつくるのに、同じく十人の労働者によりまる二年を要したものと仮定する。これらの一定量の諸貨物の価値は、投下労働量の側面から考察すれば、織物の価値は小エビの価値の365倍であり、ブドウ酒のその半分であろう。またブドウ酒の価値は小エビのその730倍とみなすことができる。斯様に貨物の価値が総て投下労働量によつてのみ決定されるものとすれば、尺度の問題も直ちに解決し、彼自らいうように、絶対価値の尺度——完全なる価値尺度が存在することになるのである。しかしながらリカードウには利潤の問題が存在する。上にあげた設例において、織物部門では資本の回転に一年を要するため、その生産者は更にその生産期間に相当する利潤部分を請求するのゆえをもつて、諸貨物の価値比率は投下労働量——絶対価値には比例しないというのである。同様にしてブドウ酒製造部門では、その生産期間に比例してより大なる利潤部分を獲得しうることになるのであるが、これは彼が価値論において「修正」を認めたところである。更に続けてこういつている。「さて、吾々は吾々の標準 *standard* としてこれらの諸商品のいずれを選ぶべきか？ もしも生産に使われた労働量が価値の唯一の識別基準 *test* であるならば、それらはすべて誤りなきものであろう。……利潤が5パーセントに下落するとき、もし吾々が織物を〔標準に〕選ぶとすれば、小エビは価値において騰貴し、ブドウ酒は下落するであろう。もし吾々がブドウ酒を選べば、小エビは非常に騰貴し、織物は少しばかり騰貴するであろう。そしてもしもわれわれが小エビを選べば、ブドウ酒も織物も共に非常に下落するであろう。ブドウ酒は織物よりより大なる程度に。」(Works, Vol. IV, p. 403.) この理論が『原理』第一章第六節において展開されているところのもの（「はしがき」に引用しておいたもの）である。利潤の作用による絶対価値と相対価値の偏差の存在するという、したがつて一貨物はその絶対価値が不変であつても、社会的貸銀率乃至利潤率の変化によつて価値変化を余儀なくされるということ、更に尺度商品に如何なる貨物を選定しようとも、利潤変動の影響が個々の商品



においてそれぞれ異なるということは、彼のいう絶対価値尺度の不可能なることを意味している。また尺度商品におけるかかる偏差の存在は（それが一商品である限り、そしてリカードウは貨幣も商品として把握している）、等貨物の価値不変——「それ自身他の諸貨物の蒙むる変動を全くまぬがるる」（Works, Vol. I, p. 43. 邦訳（上）47頁）という不変性——を否定するものである。かくて絶対価値の尺度——不変の価値尺度は存在し得ない。彼自身マルサスへの手紙にいう。「絶対価値の尺度の非存在という議論……このようなものは存在しません。……完全なる価値尺度というものは存在しませんでしたし、また今後とも決して存在しないだろうと思います。」（Ricardo to Malthus, 15 Aug. 1823.）

前述のように利潤把握の曖昧さは結局不変の価値尺度を否定することとなつたのであるが、更に注意しなければならないのは、価値の「標準」の確定をも不可能ならしめたことである。彼が一日の労働を要する貨物と一年を要する貨物とを比較するとき、後者のみに利潤を生じ、前者には全く利潤を生ぜざるものと仮定している（これは価値が労働及び利潤よりなるという彼の命題と矛盾するものであるが）。斯様に考えれば、一日の労働を要する貨物は一年を要する貨物に対しては利潤を生じないであろうが、二時間を要する貨物に対しては利潤を生ずるであろう。同様に、一週間に要費する貨物は、一ヶ月を要費する貨物に比しては利潤を生ぜざるものとなり、一日を要するものに対しては利潤を生ずることとなろう。時間との関連において利潤を説く場合、如何なる時点より利潤を持ち込みうるものであるか、かかる基準は何ら存在せず、また確定することも不可能である。同じく利潤の限界も画せられず、平均値としての利潤量も確定し得ない。したがつてわれわれは彼の理論から標準概念をくみとることはできないのであるが、この点に関してマカロツクへ次の如く伝えている。「私が価値について与えた説明に対して、私は自分で不満足なのです。なぜなら、私の標準をどこに求めてよいかは正確には分からないからです。商品の相対的価値を支配する原則としては、これを商品に実現された労働量に求めるのが正しいと私は充分確信しています。けれども絶対価値の標準を決定する段になると、一箇年の労働を選ぶべきか、それとも一箇月の労働を選ぶべきか、

もしくは一日の労働を選ぶべきかの点でつまずきます。」(Ricardo to McCulloch, 25 Jan. 1821.) 彼は価値の尺度として金を選定するに当り、金が一年の生産期間を要するものと仮定している (Works, Vol. IV, p. 405.)。この点マルサスの標準労働は正当に評価されてよいであろう。

結局彼の価値論からの結論は「絶対価値の尺度の非存在」ということであつた。彼の場合も、全ての貨物が労働のみによつて生産されるなり<sup>(2)</sup>、またすべての貨物が全く同じ生産条件(資本構成及び資本の耐久度=回転率が同一)のもとに生産されるとすれば、完全なる価値尺度は存在することとなるのであるが、この想定は到底許されざるところである。しかしながら、マルサスにおけるが如く、価値実体論と価値尺度論との間に一つの断層を置くという形では解決しなかつた。もとよりリカードウにとつて、相対価値に及ぼす利潤の影響は軽微な、第二義的なものであり、基本的には価値は投下労働量によつて決定されるものであつた。したがつて完全なる価値尺度を求めることはできなかつたが、残された道として「最上の」尺度を求めるべくつとめた。これは「修正」を認めながらもなお労働価値説を貫こうとした彼の態度に通ずるものである。

(2) ここで注目すべきことは、マルサスもリカードウも共に価値尺度論の吟味の末、利潤部分も労働と呼び得ないか、とそれぞれ個々別々にではあるが、自問するに至つてのことである。解答は共に否定的であるけれども。(T. R. Malthus; Principles, p. 91, 邦訳(上) pp. 162~3.; Ricardo to McCulloch, 21 Aug. 1823.)

リカードウの尺度論が語るところは、絶対価値と相対価値の間に一つの偏差が存在し、これが完全なる価値尺度を拒否するということであつた。したがつてもしその偏差が最も零に近い商品が発見できるものとすれば、その商品は社会の平均的生産条件のもとに生産されていることを意味する。と同時にそれは社会の最大部分の商品が生産されている諸条件の平均的基準を指し、価値も「変動することがより少なく」(Works, Vol. II, p. 30. 邦訳(上) 100~101頁)、彼のいう不変性に最も近き商品である。そして彼は金をもつてかかる商品と想定するのである。かくて『原理』中の次の章句も意義づけられよう。「金はその生産上二種の資本を使用する割合が大多数貨物の生産に使用せらるる平均量に最も近い貨物であるとは認められ得ぬであろうか。この割合は、固定資本は

殆んど使用せられぬ一方と、労働が殆んど使用せられぬ他方の両極端から、あたかも両者間の中項を成すが如きはほ等距離のところ位に位するものではあり得ないであろうか。」(Works, Vol. I, pp. 45-46, 邦訳(上) 49頁) かかる過程を経てきた貨幣の選定は、マルサスのそれと根本的に性格を異にするものであるといわなければならない。

貨幣も一商品である以上、その価値は可変的である。かつ社会の労賃、利潤(率)の変動は貨幣商品金の相対価値に影響なしとしない。彼が貨幣の問題を理論の展開に導入する際に、「貨幣の価値は変化なきものと仮定する」(Ibid., p. 46, p. 87, 邦訳(上) 49頁, 78~79頁)と条件を附しているのは、この点を考慮したものにとることができよう。そして価格の変化はすべて商品の側の価値変化の反映であると看做したのである。

## む す び

古典学派は不変の価値尺度を求めた。マルサスにはそれが支配労働として存在しえたが、リカードウには存在し得なかつた。しかしながら、マルサスの尺度論では、彼の価値論・貨幣論の紐帯が断たれ、それぞれ分離してしまっている。したがって彼の理論体系のうちに、独自の貨幣観と呼びうるほどのもの——貨幣の存在それ自体が生産を刺戟し、産業の奨励に役立つという考え(Principles, p. 55, p. 324 footnote. 邦訳(上) 91頁, (下) 203~4頁註)——は存在し得ても、あえて貨幣理論と呼びうるほどのものを看取しようとすることは困難である。

他方リカードウは貨幣論をその出発点とし、『原理』の体系化によつて深められ、補強され、また貨幣を一応(マルサスに比しても)特殊の商品として、諸商品との対立のうちに把握していたということができよう。例えばマルサスが貨幣価値下落→農産物価格騰貴→地代(の第四の原因)と主張したのに対して、次の如く反論している。すなわち貨幣は一般的流通媒介物であるために、貨幣の価値変動は「すべての諸商品に共通であり……」(Works, Vol. II, p. 149. 邦訳(上) 318頁, R註)「一貨物の価値の騰貴と価値を測定する媒介物の下落

との間には 顕著な相違がある……」(Ibid., p. 144. 邦訳(上) 314頁, R註, cf. Principles, Ch. I, Sec. VII.) と。しかしながら, この点をリカードウがどの程度まで十分に正しく展開し得たかは, また別に問題としなければならないところである。

また小稿でみたように, 彼は投下労働量による貨幣の価値規定を考慮しており, 同時に各国それぞれの富裕の程度に照応した貨幣量を想定し, 流通必要量規定への接近が試みられている。『経済的にして安全なる通貨』では必要量規定が端的に展開されている (Works, Vol. IV, p. 55. 小畑茂夫訳「リカードウ貨幣銀行論集」266頁) が, 他方いわゆる数量説的見解も積極的にのべられている。この点をどう解するかということも当然問題としなければならないのであるが, その際, われわれは, 彼が一般的流通媒介物なる語のうちに如何なる意味を含ませていたか, また彼が直面した問題との関連はどうであつたか, という側面からの吟味を必要とするであろう。

(1959. 7. 7.)